

京都市地域・多文化交流 ネットワークサロン通信

発行日 2018年1月1日 編集・発行 京都市地域・多文化交流ネットワークサロン 第24号

東九条と文化芸術

何年か前に、ネットワークサロンの近所に住むハレモニ（おばあさん）に、たくさんの白菜のキムチを作ってもらいました。ハレモニが、白菜をザクザク切り、適当に塩をまぶしていくのを見て、私は「手抜きキムチだな。これは美味しくないな」と心の中で呟いてしまいました。私自身もキムチの作り方を書いた本を元に、家でキムチを作っていたからです。ところが、出来上がったキムチは甘さと辛さが絶妙なバランスに仕上がった、とても美味しいものでした。私のように、本に書いてある通りに、正確に材料のグラムを量って作ったキムチなど足元にも及ばないものでした。ハレモニの経験と伝統から生み出されたキムチは、ハレモニの「自己表現」なのだと感じました。

京都市は、昨年4月に「京都駅東南部エリア活性化方針」を策定しました。ネットワークサロンは、この京都駅東南部エリア（東九条東北部）の中にあるため、事業内容を活性化方針に連動させることが多くなっています。活性化方針は、京都駅東南部エリアのまちづくりに「文化芸術」という新しい視点を取り入れ、「若者」を中心とした人の流れを生み出し、エリアの人口減少や高齢化に歯止めを掛け、京都駅周辺と京都全体の活性化につなげようとするものです。

東九条は人が住む地域であるため、「文化芸術」が新たに入ってくることは、住民にとっては違和感のあることだと思います。しかし、ハレモニが無意識に「自己表現」しているキムチ作りを「文化芸術」と捉える直すことが出来るのならば、新たに入ってくる「文化芸術」は違和感のないものになります。東九条に元々あった「文化芸術」と新たな「文化芸術」が融合し、更なる「文化芸術」を生み出していくことが、これからの東九条のまちづくりだと考えています。

（前川修 京都市地域・多文化交流ネットワークサロン）



1999年 40番地夏祭りの風景 撮影：中山和弘氏

東九条ならではの音楽祭～2017 東九条音楽祭～開催される

2017年11月26日(日)「故郷の家・京都」にて、2017 東九条音楽祭(第2回東九条音楽祭)が開催されました。2016年に開催された第1回音楽祭があまりにも素晴らしく大好評だったので、来年も是非開催したいという声が大きく、今回、開催に至りました。

最初に登場した京都市立芸大生のサクソアンサンブルは、なんと4人の演奏者全員が民族衣装のチマ・チョゴリ姿で演奏されたのには驚きで、より親近感が持てました。続いてクラシックギター演奏が2つあり、まずはエルシステマで指導されている渡部延男さんのソロ演奏があり、難病のジストニアと闘いながら演奏に取り組みまれておられる姿に感動しました。クラシックギター第2弾は、宮下バレエのピアニスト・作曲家、宮下和夫さんがこの日のために書き下ろされた『アリラン』による世界平和への祈りを、小学生の女子3人のトリオ・シュシュが見事に世界初演を行いました。続いて、東九条で生まれ育ったソプラノ歌手、北村柚起恵さんによる、韓国歌曲3曲が朗々と歌い上げられました。第1部の最後は、コリア伝統楽器カヤグムと伴奏のチャングによる「アリラン変奏曲」を金慶子さんと具用九さんが演奏されました。

第2部の最初は、昨年も演奏され大好評だったチェリストの神倉辰侑さんと、ピアノの藤田菜緒さんによる演奏が今回も見事に演奏され、特にアンコールで演奏されたアベ・マリア(バッハ・グノー作曲)は、自然に涙が溢れる演奏でした。

今回の最後は、東九条に縁のあるピアニスト原野尚起さんによるショパンとリストの演奏で、とても心にしみいる演奏でした。最後は出演者、観客全員によるアリラン合唱でコンサートは締めくくられました。

当日はお年寄りから幼い子どもたちまで、普段着姿でクラシック音楽を楽しむ東九条ならではの風景を見ることが出来ました。協賛金や当日多くの募金を寄せて下さった皆様に、心より感謝致します。

(朴実 東九条音楽祭実行委員長)



故郷の家・京都 雲史ホール 外観



京都市立芸術大学 サックス四重奏のみなさん



渡部延男さん



Trio chouchous のみなさんと、作曲家の宮下和夫さん



朴実 実行委員長



神倉辰侑さんと、藤田菜緒さん



出演者全員でフィナーレ

～出演者からのメッセージ～



<北村柚起恵さん>

この度は東九条音楽祭に出演させて頂き、ありがとうございました。

生まれ育った東九条で、この様な素晴らしい出演者の方々、聴きにきてくださった観客の方々と、音楽を共有できた事を心から嬉しく思い、感謝致します。

今回、テーマが Korea という事で、以前にも歌わせて頂いたことのある3曲を選びました。全て、植民地時代の曲

ですが、それぞれに美しさ、儂さ、力強さのある素晴らしい曲です。私の歌で上手く表現出来たかわかりませんが、聴いてくださった方の心を少しでも揺らす事が出来ていれば嬉しいです。今後も全ての音楽をもっと身近に、私の場合は歌で色々な表現が出来たらと思います。

最後になりましたが、この様な機会をくださった朴実さん、東九条音楽祭に関わってくださった全ての皆様に御礼を申し上げます。これからも東九条音楽祭と一緒に盛り上げていきましょう!!



<金慶子さん>

東九条音楽祭の会場には、穏やかで温かい空気が流れていました。

「歴史は民衆がつくり、公演は観衆がつくる」ということばを聞いたことがあります。私にとって東九条音楽祭は、このことばを思い出させてくれた、そんな音楽会です。昨年に引き続き、2度も出演の機会をいただき、音楽祭を通して出会った方々と素晴らしい時間を過ごすことが出来ました。

私は今回のテーマ、「コリア」に因んで朝鮮民謡「アリラン」の中から、各地方に伝わる4曲（旌善アリラン、珍島アリラン、密陽アリラン、江原道アリラン）をカヤグムで演奏させていただきました。また、フィナーレでも観客の皆さんと一緒に「アリラン」を奏でることができ、感慨深い舞台となりました。懐かしそうに口ずさんでおられる方、体を揺らしながらリズムを取られる方、それぞれの思いが会場いっぱい溢れていてとても感動

的でした。

同じ空間で交わした感動をいつまでも大切にしていきたいと思います。ご来場いただいた方々や素晴らしい演奏者の皆さん、一番ご苦労されたスタッフの皆さん、本当にありがとうございました。これからもずっとこの音楽祭が行われることを心より願っています。



〈原野尚起さん〉

祖母が住んでいたということもあり、この度、幼いころから馴染みのある東九条で演奏させていただけたことをとてもうれしく思います。

故郷の家の利用者様に向けたコンサートでは、韓国民謡アリランの旋律に合わせて、客席から聴こえる歌声がとても印象的でした。本番は、韓国の民族音楽から、クラシック音楽まで、幅広い多種多様なプログラム構成となっており、演奏後に沸き起

こる拍手とアンコールの掛け声に、この地域ならではのあたたかさを感じました。

「雲史ホール」というこれだけ素晴らしい会場があることを、より沢山の方に知って頂き、東九条という地域が、音楽を通して様々な文化を発信し、共感できる場所となっていくことを心から願っています。



東九条音楽祭当日、リハーサルの合間に、雲史ホールをお貸しくださった故郷の家・京都の利用者の方々に向けてミニコンサートを行いました。Trio chouchous、朴哲さん、原野尚起さんが朝鮮半島の民謡や民族楽器のチャンゴを演奏してくださいました。

登録団体より活動報告～日本自立生活センター（JCIL）

居場所づくり勉強会 第49弾 「東九条と崇仁のいま・むかし」

日本自立生活センター（JCIL）は、どんな障害があろうと同じように地域で暮らすこと、障害のある人もない人も同じ「人」であることを認め合うことを大切にして、30年ほど前から活動してきた障害当事者の団体です。生活や活動の場として長年かかわってきた地域について改めて勉強しようということで、2017年10月14日に、京都市地域・多文化交流ネットワークサロンのホールをお借りして、「居場所づくり勉強会 第49弾 東九条と崇仁のいま・むかし」を開催させていただきました。

企画では、山本崇記・静岡大学准教授に東九条、崇仁の歴史と現状を説明していただいた上で、金順喜さんと矢吹文敏さんに、それぞれの地域とのつながりについて語っていただきました。山本さんから、被差別部落は六条、七条と南下し現在の崇仁地区に至っていること、東九条の朝鮮人集落は日本による朝鮮半植民地支配の過程でできたこと、両者は混在して暮らしてきたこと、芸大移転を控えて地域が大きく変わろうとしていることを教えてもらいました。

金さんから、食べ物、住宅、働き方など身近な話題を通した暮らしぶりの変化について話を伺いました。日本人・健常者・男性中心の日本社会において、在日・障害者・女性として生きてきた難しい思いも感じることができました。一方、矢吹さんは、村落といった意味で「部落」という言葉を使ってきた山形から来て、事情も分からないまま「実験」として東九条で暮らし始めた頃からの経験や運動との関わりについて話をしてくれました。その「実験」から得られた知見は示唆に富むものでした。

とはいえ、テーマの大きさ、複雑さから言っても一回でまとまるようなものでないことは明らかで、機会があれば再度企画を行い、もっと勉強をしていきたいと感じました。（JCIL 自立支援事業所 橋口昌治）

**山本崇記（静岡大学）**

私が JCIL と接点を持ったのは、1999 年に京都に来た時に東九条マダンの車いす体験コーナーをお手伝いした時に遡ります。その時は、なぜ車いす体験コーナーがあるのか、誰が主催しているのかも知りませんでした。私を東九条や朝鮮学校に誘ってくれた先輩が介助の仕事をしていたこともあり、JCIL の存在を知りました。その後、崇仁地区や東九条地域の住民運動やまちづくりに関わったり、研究をさせてもらったりする中で、JCIL の松ノ木の旧事務所や松田町の新事務所にも出入りさせて頂くことが増えました。いま、思うのは、東九条地域で一番元気な人たちが集まる場所が JCIL ではないかということです。また、障害者と健常者、マイノリティとマジョリティの関係が、時に鋭く時に軽やかに問われながら、当事者運動が展開されていることです。今回、矢吹文敏さんと金順喜さんと同じ場を共有できたことは大変貴重な機会となりました。部落差別や朝鮮人差別の問題をこの地域で正面から問える／超えるポテンシャルを感じる場になりました。

金順喜・キムスニ (JCIL)

私が所属している(日本自立生センター)の企画で、私の生まれ育った町 東九条をテーマに、「東九条と崇仁のいま・むかし」を開催できたことを感謝しています。それは、長い間活動を共にした仲間であっても、テーマが参政権や所得保障の(障害年金)になると途端に自分だけが蚊帳の外、疎外感を感じるのがしばしばありました。当日、私の話が終盤になった頃、仲間の笑顔が見えました。拍手喝采を頂き「一帯になれたのかな」と喜びもありました。

今はまた『黙らないことが当事者の役割なんだ』と自覚がまた少し芽生えつつあります。



～知らないからこそ～ 矢吹文敏 (JCIL)

私は、30年前に京都に来るまでは、部落差別の問題や在日外国人(特に韓国・朝鮮)に関する差別の問題などについてほとんど知ることが無く、映画や新聞報道などで見聞きする少しの情報による知識しか無かった。そのわずかな知識の中で京都に住むこととなり、しかも、中でも被差別地域と言われた南区の東九条に、障害者の立場で飛び込んできた。それはまさしく、日本自立生活センターの創設者である長橋氏が「お互いの差別がいかに理不尽なもので、虚しいものか。在日者と部落の人たち、さらに北とか南とかいう中に、障害者の存在がどのようなものか。私たちが身をもってその矛盾や解決策を見出していく存在でありたい。」という実験・実践を行うべく私たちにその継承を委ねた。

いずれの差別構造も、知れば知るほど解決の入り口は遠く、学べば学ぶほど私たちの力が及ばない。いつそのこと、何も知らない方が障害者としての立場で自由に活動できるのではないか。「差別」という行為も結果も、いかに醜く意味のないものか。人の気持ちや生活を傷つけることはあっても生産性や癒しの世界はない。過去の陰湿極まりない差別の歴史を忘れることはもちろんできないし、本質的な解決は歴史を無視することではありえないのだろう。

しかし、敢えて言うのなら、今現在を出発点として仲良くする努力も必要なのではないか。私たちにしても日常的な障害者への差別を無視したり許したりすることは出来ないが、新たな出会いを基に共に歩む努力は必要と考える。だからこそ東九条を大切にしていきたい。

岡山祐美 (JCIL)

京都市外から移住してきて以来、東九条・崇仁を忌避する発言を、実際に目の当たりにすることが何度かありました。しかし、反論することがあまりできませんでした。なぜなら、東九条・崇仁の歴史どころか最近のことでさえ、私自身もよく知らなかったからです。それが、今回の勉強会を開くきっかけの一つになりました。

異なる立場のお三方のお話からは、この地域の色々な側面を、過去から現在に渡って垣間見ることができました。差別の歴史を知ることはもちろん重要ですが、それと共に、街づくりの変遷や街の経済活動といった大きな文化から、一人の人がどんな日常を生きてきたのかという身近な文化まで、多角的に知ることが深い理解につながると再認識できた勉強会でした。

～はじめまして、HAPS（はっぷす）です～

私たちは、京都市内の若手芸術家をさまざまな面で支える活動をしています。今年度、ネットワークセンターが立地する京都駅東南部エリア（*1）で、「文化芸術」と「若者」を基軸とした新たなまちづくりに向けて地域を盛り上げていくため、京都市から委託を受け（*2）「京都駅東南部エリア アート・トライアル2017-2018」と称してワークショップやイベントを企画運営しています。

11月には、まずエリア内を歩いてみようと、「希望の家 秋まつり」にあわせてまちあるきを行いました。参加者は元山王小学校に集合、山王自治連合会の藤岡正男会長より地域についてのご説明をいただき、お祭りの会場へ移動。ネットワークセンターの前川修所長より、秋まつりの成り立ちをお話しいただいた後、バザーや出店を楽しみました。それから（一社）アーツシード京都が劇場としてリニューアルしようとしている倉庫の中を見せていただき、再び移動後、演劇の稽古期間中のスタジオも見学。公演を控えた演出家の方からもお話を伺いました。最後はBooks×Coffee Sol.で、まちあるきで感じたことやこれからのまちづくりについて参加者同士の意見交換を行いました。12月には「アートによるまちづくりを知る」をテーマにトークを行いました。東九条マダンや、その中でも障害を持った方の楽器演奏の取り組み「サムルのたまご」に関わってこられた具明德さんと李奈美さんに、これまでの取り組みについて、直面してきた課題や成果などをお話しいただきました。その後、神戸・新長田の劇場 ArtTheater dB 神戸を運営するNPO法人ダンスボックス理事長の大谷燠さん、城崎国際アートセンターの館長 田口幹也さんから、アートと地域の良い関係を模索しつつ進めてこられた数々の事例をお話しいただき、進行役を務めてくださったロームシアター京都の蔭山陽太さんが、ご自身の経験をもとにそれぞれの話をつなぎ、今後の課題や未来への期待を語ってくださいました。

どちらの催しにも、地域にお住まいの方、アート関係者、まちづくりに興味のある方など、幅広い層の参加があり、終了後には、参加者同士が食事をしながら関係を深める交流会も開きました。この地域の雰囲気、初めて来た参加者にも味わってもらい、顔の見える関係づくりの第一歩になったのではないのでしょうか。

2月には、エリアの魅力を集めて共有するワークショップ、3月には1年間の総まとめとなるイベントを行います。今年度の取り組みが、これからのまちづくりについてさまざまな立場の人が共に考えるきっかけになればと思います。詳しくはフェイスブックで最新情報をご覧ください。（岡 永遠）

* 1…南区山王学区の竹田街道より東側の7箇町。

* 2…京都市が2017年3月に策定した「京都駅東南部エリア活性化方針」に基づく、京都市からの委託事業。



京都駅東南部エリアアート・トライアル
2017-2018

□ 所在地：〒601-8006 京都市南区東九条東岩本町 31（京都市地域・多文化交流ネットワークセンター内）

□ TEL：075-671-0108 □ FAX：075-691-7471 □ E-Mail：info@kyotonetworksalon.jp

□ 開館時間：9時～17時 □ WEB サイト：http://www.kyotonetworksalon.jp

□ JR 京都駅八条口・京阪東福寺駅・市営地下鉄九条駅より徒歩 15 分

京都市バス 42・202・207・208 系統 九条河原町より徒歩 10 分／84 系統 河原町東寺道より徒歩 1 分